



大久保謙之丞 (写真118)

四国新道の建設 近代の県内交通を画する事業としては、四国新道の建設と讃岐鉄道の敷設を置いて他にはない。四国内においては、瀬戸内に面した陸上部は東西に結ばれても、南北については、中央部において四国山脈が横たわり、言わば四国を南北に分断している形となっているため、古来、人の行き来はもちろん、物資の輸送などの交通はきわめて困難であるところから、早くからその解決が住民の願いであった。

しかし、南北に道路を切り開くことはかなりの難工事であって、容易に事業を実施するわけにはいかなかった。大久保謙之丞はこの問題に深い関心を持ち、計画を立てて、世論に訴え、賛同者を集めると、自費を注ぎ込んで、繰り返し測量等の準備作業を進めた。特に、県外の徳島・高知両県の有志とも協力して、中央の関係官庁に支持を求め、ようやく、その時期が到来したのを見て、明治十九年二月、高知・徳島・愛媛（讃岐を含む）三県の知事連署でもって、内務大臣山県有朋あてに、四国新道建設の竣工時期を明確に上申することをもって、工事を開始することになった。

明治十九年四月七日、午前八時から琴平神事場において、各県知事・県会議員や関係者多数を集めて、盛大な新道建設の起式を行った。この三日間にわたる起式の祝賀行事は、舞踊・相撲・軽気球・猿楽や諸演芸と投餅を行うなど、新道建設にかけた人々の絶大な願望が如実に示されている。四国新道の路線ルートは、丸亀・多度津・善通寺・琴平から阿波池田を経て高知・須崎に達し、更に、佐川・松山・三津浜と連なる、四国全県にまたがる幹線道路である。

路線開削「申合書」によると、「道幅三間以上並木敷両側老間宛ニシ溝敷ハ実地ニ就テ適宜定ムル事」、「橋梁ハ内法幅式間以上ノ事」、「通過動荷量ハ橋梁長老尺毎ニ半「トン」と定ム」などとなっており、ほぼ幅員九尺余りを計画したものであった。総延長二八〇詰、未だ、鉄道も自動車もなく、ほとんど、人馬の交通程度であった当時としては、非常に雄大な、将来を見通した事業として高く評価できるであろう。

八年をかけて明治二十七年に完成するが、この大工事に心血を注いだ大久保謙之麁の情熱と先見の明を指摘せずにはいられない。彼は、嘉永二年（一八四九年）、三野郡財田上村の生まれ、愛媛・香川の県会議員を勤め、讃岐鉄道、多度津港の改築、北海道開拓移住、あるいは農村振興策など、およそ県内外のあらゆる公共的事業や社会基盤確立のための仕事に全力を尽くした事業家であった。